



今春、子どもの無国籍に関する記事が新聞に掲載されました(朝日新聞朝刊2021年4月5日/朝日新聞デジタル連載「国籍のない子どもたち」2021年4月5日〜8日)。ISSJも取材を受け、子どもが無国籍となる背景や事例をお伝えしたところ記事にとりあげられ、これをきっかけに話を聞かせてほしいというテレビ局からの問い合わせが相次ぎました。

法務省の統計によると、無国籍として登録されている20歳以下は279人出(出入国在留管理庁在留外国人統計2020年6月末)。2歳以下がその7割を占めています。

無国籍が生じる類型はさまざまですが、ISSJでは主に社会的養護下で育つ外国籍の子どもの国籍取得を支援しています。児童養護施設から退所し成人した子ども

無国籍の子ども Q & A BOOKを 作成しました

が、婚姻手続きや妊娠、出産する場面でも無国籍状態であることに直面し、ISSJに相談が寄せられることもあります。国籍がなければ、パスポートが取得できず海外渡航に制約が生じたり、就職で不利になったり、大切な機会が奪われることもあります。国籍を持っていないということは、社会的に存在を認められていないというだけでなく、自身のルーツを知ることができないということでもあります。

5月には「児童養護施設等における外国籍等の子ども・保護者への対応等に関する調査研究報告書」が公開されました(みずほ情報総研株式会社/厚生労働省令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業)。ここから垣間見えるのは、子どもが社会的養護下にあるとき、外国人であるというアイデンティティや国籍の問題はニーズとして後回しにされやすい現状です。周りの大人がまずは国籍の大切さに気付いてあげること、子どもの人生でできる限り早い段階で国籍取得に取り組むこと、そのための支援体制を築くことが求められます。

ISSJでは、令和2年度東京都に在住外国人支援事業の一環として、無国籍の子どもQ&A BOOKを作成し、児童相談所や児童福祉施設等へ郵送しました。このリーフレットで一人でも多くの子

【相談例】

問題 無国籍状態
当事者 児童養護施設に入所するAさん3人きょうだい
相談者 児童養護施設の職員

フィリピン人の両親をもつAさんと2人のきょうだいは、日本で生まれました。父親は服役中、母親は大使館で子どもの出生登録をしないままフィリピンに帰国し、別の男性と生活を始めていました。ISSJはフィリピンの社会福祉開発省のソーシャルワーカーに、母親を訪問して出生登録に必要な書類をそろえる支援を依頼しました。同時に、フィリピン大使館から父親を訪問してもらい、父親の出生登録書と認知宣誓供述書への署名を得ました。1年半を経て、Aさんたちの国籍取得ができることになりました。



どもの無国籍状態の解消に役立つことを願いつつ、更なる情報発信を続けていきます。

Information



活動報告書「福祉の視点を取り入れた社会統合の試み」を公開しました

ISSJでは2019年度より、中央共同募金会赤い羽根福祉基金の助成を受け「日本語教室を介した外国につながる家族へのアウトリーチと相談支援事業」を実施してまいりました。2年間の事業の成果を活動報告書としてまとめました。ISSJのウェブサイト、PDF版とデジタルブックで公開しています(www.issj.org/info/3636)。

外国につながる子ども・女性に着目して、教育の場(日本語教室・学習支援室)が、参加者が地域とつながり課題解決にもつながる場となることを目指す「教育×福祉」の取り組み。より多くの地域で展開されるよう、これからも活動を継続していきたいと考えています。



夏の映画会は中止です

新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、2021年度の夏のチャリティ映画会&バザーも引き続き中止にすることに決定いたしました。秋の映画会&バザーに関しましては、決定次第皆さまにお知らせいたします。ご理解賜れますと幸いです。

支援をつなぐ —ご支援のお願い—

皆様のご支援が、ISSJの相談者を直接支えています。少しでも多くの方に安心を届けられるよう、ご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

ISSJの活動を会員として継続的に支援していただく方法と、寄付で支えていただく方法があります。会費・寄付金ともに所得控除など税制上の優遇措置の対象となります。

- ◆ 会費(年間) 個人/5,000円 団体・法人/100,000円
- ◆ ご寄付 都度のご寄付 マンスリーサポーター寄付

【お問合せ】日本国際社会事業団(ISSJ)事務局 EMAIL issj@issj.org TEL: 03-5840-5711(平日10:00~17:00)

ISSJの活動のために温かいご寄付をいただきました。心から感謝し、ご報告いたします。

◆ 個人 32名 ◆ 団体 4団体

2020年12月 - 2021年5月 合計 1,123,200 円

【編集後記】 週に1度、Zoom越しに顔を合わせる子どもたち。再び対面で会える日が来ることを心待ちにしています!(KK) 子どもたちの成長を見られることは、ソーシャルワーカー冥利に尽きます。(MI) まだ社会の機能が完全に戻ってはいない中、クライアントと繋がりISSJの活動が継続できていることに小さな安心を感じています。(SOT) ISSJの活動を一目で伝えられる写真がないことは長年の悩み。イラストでどう補うか毎日が模索です。(YS)



支援者向け研修を開催します

ISSJでは今年度も、外国につながる子どもと家族の相談支援に関するセミナー(日本財団助成)を企画しています。5月には週に1回のスタッフミーティングで皆の意見を交わしつつ、担当スタッフで企画案を練りました。昨年度に実施した連続講座では、初のオンラインセミナー開催のため機器を揃えるところからの試行錯誤でしたが、好評のうちに終えることができました。

▼昨年度の実施報告をご覧ください
sites.google.com/view/issj-onlineseminar202021

今年度は相談支援や在留資格・国籍の基礎に加え、子どもの発達をどう支えたらいいのかわからないといった支援現場のニーズに応える内容で、9月から順次開催予定です。詳細はあらためてISSJのウェブサイト等でお知らせいたします。

【研修テーマ】

- 外国につながる家族と子どもの相談支援基礎
- 子どもの在留資格と国籍取得
- 外国につながる子どもの発達
- 子どもの国境を越えた移動と児童・家庭調査



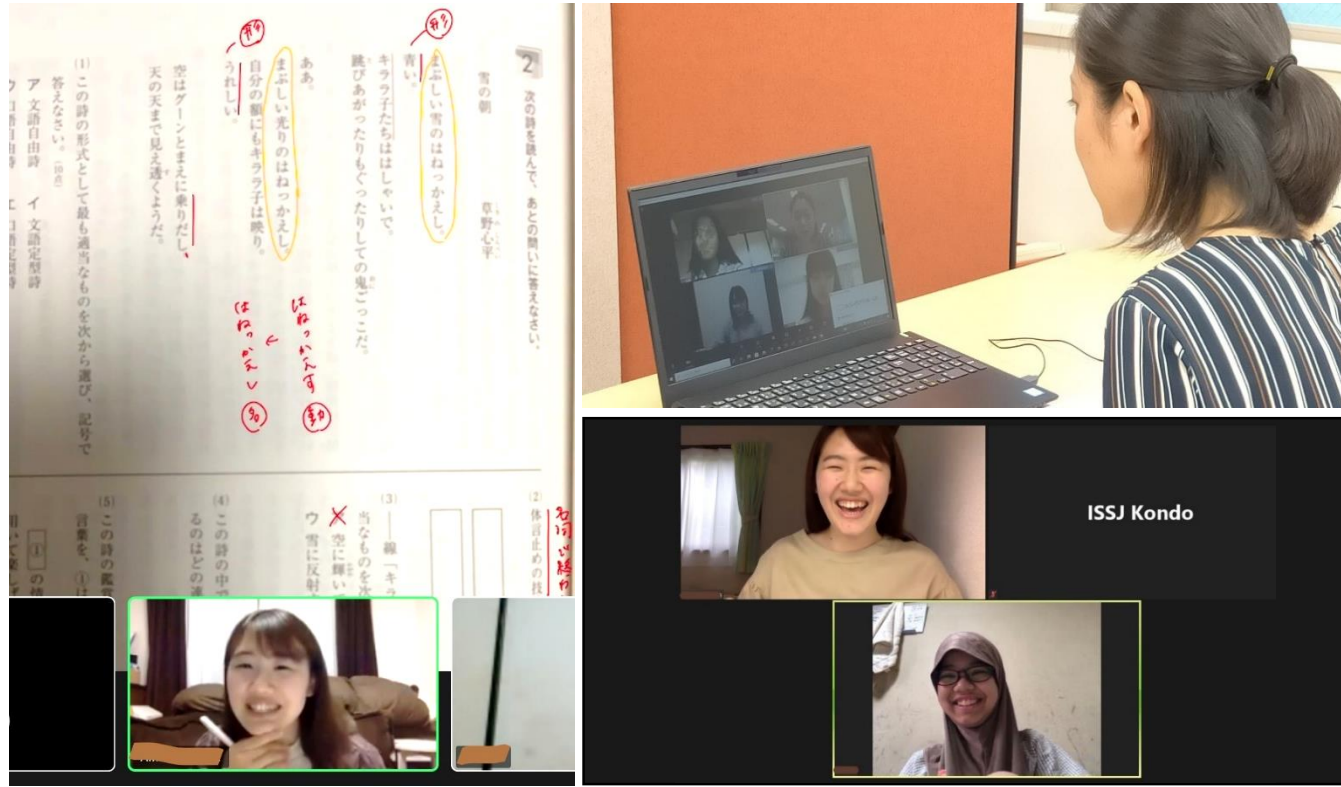
- クレジットカードでのお支払い
www.issj.org/supportus/donation

- 郵便振込
郵便振替 00190-7-64911
加入者名 社会福祉法人 日本国際社会事業団

- 銀行振込
振込先 三菱UFJ銀行中目黒支店 普通0397932
口座名義 社会福祉法人 日本国際社会事業団



社会福祉法人 日本国際社会事業団
International Social Service Japan(ISSJ)
〒113-0034 東京都文京区湯島1-10-2 御茶の水K&Kビル3F
TEL : 03-5840-5711 FAX : 03-3868-0415
発行日 : 2021年6月25日



学習支援は週に1回。毎回子どもとボランティアさんをISSJスタッフがつなぎ、賑やかなあいさつから始まります。



わが子の勉強どうする？ 親の不安に寄り添った 家庭学習支援

新型コロナウイルスの感染が拡大はじめ、突如として休校措置が取られた2020年3月。先行きが全く見えない中で私たちが懸念したのは、移住者の子どもたちの学習でした。当初ISSJに寄せられる相談の多くは、食や医療など経済的困窮に起因するものが大半を占めました。休校措置が長期化する中で、子どもたちの学習に不安を寄せる母親の声も聞かれるようになりました。

移住者家族の場合、保護者は必ずしも日本で教育を受けた経験がなく、また日本語が十分ではないため、家庭で子どもたちの勉強をみてあげることができないという課題を抱えています。そのような環境において、子どもたちの学びの場は、圧倒

的に学校が占めることになりました。しかし唯一といえる学びの場であった学校に行く機会が、コロナ禍において突如として奪われてしまいました。休校措置期間には、必然的に家庭学習の比重が高まりました。保護者の責任において家庭で学習することが求められ、宿題のプリントが配布されることもありました。周りの大人の手助けなしに、子どもたちが一人で取り組むのは容易ではありません。宿題を終わらせなさい！」「勉強をしなさい！」と言うことはできても、自ら教えてあげることができない状況が続く、母親たちは不安を募らせるようになりました。不安の中には、母親として子どもを支えることができないという悲しみも見え隠れしました。

教育格差を生まないために

言葉や文化の違いが学習上の壁となり勉強に苦手意識を感じている子どものために、それぞれの地域で個別の学習支援ができないだろうか。これまでも何かできないかと働きかけてきたものの、形にすることができないでいました。これ以上の教育格差を生まないために、今できることから始めようと考え、オ

ンラインでの家庭学習支援をスタートすることにしました。

まずは各家庭のオンライン環境を確認し、必要に応じてWi-Fiルーターや企業から寄付されたパソコンを貸し出すところからはじめました。子どもと母親の双方から話を聞き、学習の計画をたてていきます。先生は、難民や移住者支援に関心のある大学生や社会人の皆さんにボランティアでお願いをしました。子どもたちの性格や年齢、抱える課題に合わせて先生をマッチングし、Zoomを利用して個別支援ができる体制を整えました。子ども・家族を取り巻く社会課題の解決を目的とする「みてね基金」に応募したところ幸い採択され、2020年7月に本格的に開始することができました。

オンラインだからこそその強み

オンラインという閉ざされた環境であるからこそ、何か困ったことが発生した時にボランティアさんが一人で抱え込んでしまわないよう、ボランティアさんとのコミュニケーションや情報共有も密に行っています。オンラインでの学習支援は、教材の共有など、隣にいないことでちょっとしたことでも難しくも伴います。一方で、たくさん

良さがあることにも気づかされました。

例えば、遠隔地にいる子どもも先生も参加ができること、子どもは自分だけを見てもらっているという実感を得られること、画面共有という形で動画やWEBサイトなどを子どもと先生と一緒にみられること。子どもたちは、あつという間にZoomの使い方をマスターし、様々な機能を使いこなせるようになりました。チャット機能を使ってローマ字で日本語入力ができるようになるなど、これからの人生で不可欠なITスキルを知らない間に身につけていくという副次的な効果もありました。先生たちは、子どもの関心に合わせて、様々な素材を準備したり、進め方を工夫したり、試行錯誤を続けてくださっています。

先生を通して触れる外の世界

オンライン家庭学習支援では、子どもたちが大学生などの先生を通して「外の世界」に触れ、家族や友達とは異なる人間関係を築き、ロールモデルを獲得してもらうことも副次的な目的と考えています。はじめは全体的に受け身で「大丈夫です」が口癖のようだった中学生が、「次

はこれを教えて欲しい」と積極的に発話し、高校選択や高校入試についても先生に相談する様子が見られるようになりました。「先生の将来の夢は何？」と熱心に問いかける小学生もいます。「本を読むのは嫌い」と言っていた子どもが、「どんなお話か先生に教えてあげるんだ！」と自ら本を読むようになりました。週1回の学習支援を楽しみにして「先生今日は何して遊ぶ?」と、急いで勉強を終わらせるお子さんもいます。そんな子どもたちの姿に親は安心し、「とても嬉しい」と連絡をくださいます。

子どもたちや親たちからも「続けたい」という声が多く、ひとりひとりに合ったカリキュラム作りを追求しながら、今後継続できるように体制を作っていきます。



今はオンラインのみで直接会うことはできないものの、いずれオフラインでの学習支援体制も作ることができれば、と考えています。

ボランティアさんの声

学習支援に関わらせていただいて約1年が経ちましたが、あっという間でした。週に一度の1時間が、生徒さんと過ごしていると一瞬に感じるほど、いつも楽しく学習支援をしています。最初は緊張していた生徒さんも、今では学校であった出来事や困っていることなどを気軽に話してくれるほど、肩の力を抜いて接してくれているのを感じられてとても嬉しいです。私自身、オンラインで勉強を教えた経験はありませんでしたが、離れたところにいる生徒さんにこうした形で力になることができ、よかったと思っています。

杉原愛海